

紙屋治兵衛 心中天網島

近松門左衛門作

歌さん上ばつからふんごろのつころちよつ
ころふんごろで。まてとつころわつから
ゆつくるくるくたが。笠をわんがらん
がらす。そらがくんぐるくも。れんけれ
んければつからふんごろ。ナホスフシ妓が情
の。底深き。是かや戀の大海を。かへも干
されぬ蜷川。思ひくしの思ひ缺。心が心と
どむるは門行燈の文字が關。浮かれぞめき
のあだ淨瑠璃。役者物真似納屋端歌二階座
敷の三味線に。ひかれて立寄る客もあり紋
日通れて顔隠し。仕過しせじと忍び風仲居
のきよが是を見て。ウタと身をのがれが來
りける。(三保の谷が着たりける) 頭巾
の鏝を取外し取外し。二三度逃けのびたれ
ども。思ふおてきなれば逼さじと。飛びか
かりひつたり悪洒落。ごんせと留めたる女

景清鏝と頭巾。地ついでふみかぶる。客も
あり。橋の名さへも梅櫻花を描へし其の中
に。南の風呂の浴衣より今此の新天地に戀
衣。紀の國屋の小春とは。此の十月に仇し
名を。世に残せとの。フシしるしかや。今宵
は誰か。呼子鳥。覺束なくも行燈の陰行違
ふ妓の立歸り。御ヤ小春様か何といの。互
に一座も打絶え。貴面ならねば便も聞かず
氣色が悪いか。顔も細り寝れさんした。
誰やらが咄で聞けば紙治様ゆる。内から
たんと客の吟味に逢はんして。地何處へも
むさとは送らぬの。いや太兵衛様に請出さ
れ。在所とやら伊丹とやらへ行かんす筈と
も聞及ぶ。どうで御座りやすと言ひけれ
ば。ア、もう伊丹々々というてく
だんすな。それで痛み入るわいな。地いと

しほなけに紙治様と私が仲。さ程にもない
事を。あの贅こきの太兵衛が浮名を立てて
言ひ散らし。客といふ客は退き果て。内
からは紙屋治兵衛ゆゑちやと堰く程に堰
く程に。地文の便も叶はぬ様に成りやした。
不思議に今宵は侍衆とて河庄方へ送らるゝ
が。かういく道でも若し太兵衛に逢はうか
と氣遣さく。敵持同然の身持。何と其處
らに見えぬかえ。御チ、くそんならちや
つと外さんせ。あれ一丁目からなまいだ坊
主が。戯謔念佛申して來る。其の見物の中
に。のんこに髪結うてのららしい。達衆自
慢といひそな男。隨に太兵衛様かと見た。
地あれく爰へといふ間程なく炮礮頭巾の
青道心。墨の衣の玉襷見物ぞめきに取巻か
れ。鉦の拍子も出合ごんく。ほでてんほ
でてんご念佛に仇口かみませで。道具屋焚
喰流は珍しからず。門を破るは日本の朝比
奈流を見よやとて。貴の木逆茂木引破り。
右龍虎左龍虎討取つて。難なく過ぐる。フシ

月日の関や。なまみだなまいだ。くくく。

文藝ヲ迷ひ行けども松山に。似たる人なき
浮世ぞと。泣いつエ、く。ワハくく。

笑うつ狂亂の。身の果何とあさましやと。

芝を褥じゆに臥しけるは。スエテ目もあて。られ

ぬ風情なまみだなまいだ。くくく。歌い

ゑいくくく。紺屋の徳兵衛。ふさ

に元よりこひ染込みの。内の身代灰汁でも

はけず。なまみだなまいだ。くくく。

くくく。ア、これ坊様ばかさま。なんぞ。エ

エいまくしい。やうく此の頃此の席まじの

心中沙汰が鎮つたに。それ置いて國性爺くにやうぢの

道行念佛が所望ぢやと。杉が袖から奉謝ほうしゃの

錢。江戸たつた一錢二錢で三千餘里を隔て

たる。大明國への長旅は。あはぬだ佛あは

ぬだ。くくく。フッぶつくくいうて行き

過ぐる。人立ひとたち紛れにちよこく走りつつ河

内屋に駈込めば。これはく早いお出で。

お名さへ久しう言はなんだやれ珍しい小春

様く。はるくで小春様と主の花車が勇

む聲。これ門へ聞える。高い聲して小春

小春いうて下んすな。表にいやな李踏天が

ゐるわいの。地密ぢみにく頼みやすと。いふ

も漏れてやぬつと入つたる三人連。小春

殿李踏天とは。ない名を付けて下された。

先づ禮からいひまじよ。連衆。内々咄した

心中よし意氣かたよし床よしの小春殿。や

がて此の男が女房に持つか。紙屋治兵衛が

出すか。張合の女郎近付ぢやうぢかひに。地成つて置き

やとのさばり寄ればエイ聞きともない。聞

え知れぬ人の仇名を立て。手柄にならば精

出して言はんせ。此の小春は聞きともな

いとついと退けばまた擦り寄り。聞聞きと

も無くとも小判の響で聞かせて見せう。貴

様もよい因果ぢや。天満大阪三郷さんかうに男も多

いに。紙屋の治兵衛二人の子の親。女房は

従弟じゆてい同土舅は叔母おぢい。六十日く。問

屋の仕切にさへ追はるゝ商賣。十貫目近い

銀出して。請出すの根引のとは。蟻螂あまごが芥

でござる。我等女房子なければ。舅なし親

もなし叔父持たず。身すがらの太兵衛と名

を取つた男。色里で憎にくいふ事は治兵衛め

には敵あだはねども。金持つたばかりは太兵衛

が勝つた。地金の力で押したらばなう連衆。

何に勝たうも知れまい。今宵の客も治兵衛

めぢや貰をく。此の身すがらが貰うた花

車酒出しやく。エ何おしやんす。今宵

のお客はお侍衆。地追付け見えますよ。お

前は何處ぞ脇で避んで下さんと。いへど

もほたへた顔付にて。ハテ刀差すか差さ

ぬか。侍も町人も客は客。なんほ差いても

五本六本は差すまいし。よう差いて刀脇差

たつた二本。地侍くるめに小春殿もらうた。

抜けつ隠れつなされても。縁あればこそお

出逢ひ申すなまいだ坊主のおかけ。ア、

念佛の功力有難い。地ごちも念佛申そ。ヤ。

金の火入煙管の撞木つづき面白い。ちやんく。

ちやちやんちやん。歌いくくく。ゑ

い。紙屋の治兵衛。小春狂ひが杉原紙で。

一分小判紙ちりく紙で。内の身代すきや

れ紙の。鼻もかまね紙屑治兵衛。なまみだ佛なまいだ。なまみだ佛なまいだくままいだ。地暴れわめく門の口。人目を忍ぶフシ夜の編笠。同ハア、塵紙わせた。ハアきつい忍びやう。なぜ這入らぬ塵紙。太兵衛が念佛希くば。地南無あみ笠を貰うたと。引きすり入れたる姿を見れば。大小くすんだ武士の正眞。編笠越しにぐつと睨めたる。眞丸目玉はたゞき鉦。念とも佛とも出でばこそ。ハア、といへどもひるまぬ顔。同なふ小春殿。こちは町人刀さいた事はなけれど。俺が所に澤山な新銀の光には。少少の刀も捻歪めうと思ふもの。塵紙屋めが漆漉程な薄元手で。此の身すがらと張合ふは慮外千萬。櫻橋から中町くだりぞめいたら。何處ぞでは紙屑踏躑つてくりよ。地皆おじやくくと。身振ばかりは男を磨く町一杯に。フシ憚つてこそ歸りけれ。所がら馬鹿者に構はず堪へる武士の客。紙屋々と善悪の噂小春が身にこたへ。思ひくづを

れうつとりと。無挨拶なる折ふし。内から走つて紀の國屋の。杉が氣疏い顔付にて。同只今春様送つて参りし時。お客様まだ見えす。なぜ見届けて來なんだとひどう叱られます。地慮外ながらちよつと編笠押上げ面體吟味。ム、そでないく氣遣ひなし。跡つめてしつほりと小春様。したゝる樽の生醬油。花車様さらば後に青菜の浸し物と。フシ口合たらしく立歸る。至極堅手の侍。大きに不興しこりや何ぢや。同人の面を目利するは身を茶入茶碗にするか。なぶられには來申さぬ。此の方の屋敷は晝さへ出入堅く。一夜の他出も留守居へ斷り帳につき。むつかしい捻なれども。お名聞いて戀慕ふお女郎。どうぞと一座を願ひ。小者も連れず先刻参つて宿を頼み。何でも一生の思ひ出。お情にあづからうと存じたに。いかなにつこりと笑顔も見せず。一言の挨拶もなく。懷で錢よむやうに扱々俯向いてばかり。首筋が痛みは致さぬか。何と花草殿。茶屋へ來て産所の夜伽する事は。つひに無い鬨とぶつつけば。お道理くく日くを御存じない故御不審の立つ筈。此の女郎には紙治様と申す深いお客がござんして。今日も紙治様。明日も紙治様と。脇から手ざしもならず。外のお客は嵐の木の葉でばらばらく。のほり詰めてはお客にも女郎にもえて怪我のあるもの。第一勤めの妨げとせくは何處しも親方の習ひ。地それ故のお客の吟味。おのづと小春様もお氣の浮かぬは道理。お客も道理々々道理の中取つて。主の身なれば御機嫌よかれが道理の肝腎か人もん。サアはつと飲みかけわさくわつさり頼みます。小春様はる様と。いへども何の返答も涙ほろりの顔振上げ。同あのお侍様。同じ死ぬる道にも。十夜の内死んだ者は。佛に成るといひますが定かいな。それを身が知る事か。旦那坊主にお問ひなされ。ほんにさうぢや。そんなら問ひ度い事がある。自害すると首くるとは。定め

し此の喉を切る方が。たとと痛いでござんしよの。痛むか痛まぬか切つては見す。

地大方な事問はつしやれ。ア小氣味の悪い女郎ぢやと。フシ流石の武士もうてぬ顔。

闘エ、春様。初対面のお客に餘りな挨拶。ちつと氣をかへ。地どりやこちの人奪ねて

来て酒にせうと。立出づる門は宵月の。影傾きて雲の足。フシ人足薄く成りにけり。

天満に年ふる。千早振る。神にはあらぬ紙様と世の罅口に乘るばかり。小春に深く大幣の腐り。合うたる御注連繩。舞今は結

ぶの神無月。堪かれて逢はれぬ身と成り果て。あはれ逢瀬の首尾あらば。それを二人が。最後日と。名残の文の言ひかはし。

母夜々々の死覺悟。ナホス魂。抜けてとほとほうか〜フシ身をこがす。地煮賣屋で小

春が沙汰。侍客で河庄方と耳に入るよりサア今宵と。硯く格子の奥の間に客は頭巾を願の。動くばかりに聲聞えず。闘可

愛や小春が燈火に。背けた顔のあの瘠せた

事わい。心の中は皆おれが事。爰に居ると吹き込んで。連れて飛ぶなら梅田か北野

か。地エ、知らせ度い呼び度いと。心で招く氣は先へ身は空蟬の抜殺の。スエテ格子に

だき付きあせり泣く。奥の客が大欠伸。闘思ひのある女郎衆のお伽で氣がめいる。門も靜かな。地端の間へ出て行燈でも見て氣

を晴さう。サアござれと連立ち出づれば南無三寶と。格子の小蔭に肩身をすほめ隠れて聞くと内には知らず。闘なう小春殿。

宵からの素振。詞のはしに氣を付くれば。花車が咄の紙治とやらと。心中する心と見た。違ふまい。死神憑いた耳へは。意見も

道理も入るまじとは思へども。さりとは愚痴の至り。先の男の無分別は恨みず。一家

一門其方を恨み憎しみ。萬人に死顔さらす身の恥。親は無いかも知らねども。若しあ

れば不孝の罰。佛は愚か地獄へも暖かに。二人連では墮ちられぬ。痛はしとも笑止と

も一見ながら武士の役。見殺しには成り難

し。定めて金づく。五兩十兩は用に立て、ても助け度し。神八幡侍冥利。他言せま

じ。地心底残さず打明けやと。叫びけ手を合せ。闘ア、忝い有難い。馴染好みもない

私。闘御誓言での情のお詞涙がこぼれて忝い。闘ほんに色外に顯るでござんする。

如何にも〜紙治様と死ぬる約束。親方にせかれて逢瀬も絶え。差合ありて今急に請

出す事も叶はず。南の元の親方と爰とに。まだ五年ある年の中。人手に取られては私

は元より主は猶一分立たず。いつぞ死んでくれぬか。ア、死にましょと引くに引かれぬ義理詰らふつと言交し。地首尾を見合せ

合圖を定め。抜けて出でよう抜けて出よと。いつ何時を最期とも其の日送りのあへない

命。闘わたし一人を頼みの母様。南邊に賃仕事して裏屋住。地死んだ跡では袖乞非

人の餓死もなされうかと。是のみ悲しさ私

とても命は一つ。闘水臭い女と思召すも恥かしながら。其の恥を捨て、死にともない

が第一。地死なずに事の済むやうにどうぞどうぞ頼みやすと。語れば顔く赤ら顔。そとははつと聞き驚く。思ひがけなき男心木から落ちたる如くにて。氣もせき狂ひ扱は皆嘘か。調エ、腹の立つ。地二年といふもの化された。根性腐りの狐め。踏ん込んで一討か面恥か、せて腹いよかと。歯ざりきりく口惜涙。内に小春が啣ち泣き。調卑怯な頼み事ながら。お侍様のお情。今年中來春三三月の頃迄。私に逢うて下さんして。地彼の男の死に、來る度毎に。邪魔に成つて期を延しく。自ら手を切らば。先も殺さず私も命助かる。何の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へば悔しうござんすと膝に。もたれ泣く有様。調ム、聞届けた思案あり。地風も來る人や見ると。格子の障子ばたくと。立聞く治兵衛が氣も狂亂。エ、流石實物安物め。ど性骨見違へ。魂を奪はれし巾着切め。斬らうか突かうかどう障子に映る二人の横顔エ、くらは

せたい踏みたい。何ぬかすやら顔き合ひ。拜む呷くほえるさま。胸を押へ擦つても堪へられぬ堪忍ならぬ。心もせきに關の孫六、一尺七寸抜放し。格子の狭間より小春が脇腹。こゝどと見極めぬいと突くに座は遠く。是はとばかり怪我もなくすかさず客が飛びかゝり。兩手を掴んでぐつと引入れ。刀の下緒手ばしかく格子の柱に雁字搦みしつかと締付け。小春騒ぐな。覗くまいぞといふ所に亭主夫婦立歸り。是はと騒げばア、苦しうない。調障子越しに拔身を突込む暴れ者。腕を障子に括り置く。思案あり繩解くな。地人立あれば所の騒ぎ。サア皆奥へ。小春おじや行て寝ようあいとは言へど見知りある脇指の。突かれぬ胸にはつと貫き。調醉狂の餘り色里にはある習ひ。沙汰なしに往なしてやらんしたら。サア河庄さん。私やよささうに思ひやす。いかなく身次第にして皆這入りや。地小春こちへと奥の間の影

は見ゆれど括られて。格子手櫃にもがけば締り。身は煩惱に繋がる、犬に穿つた生恥を。覺悟極めし、マシ血の涙しほり。泣くこそ不便なれ。ぞめき戻りの身すが太兵衛。扱こそ河庄が格子に立つたは治兵衛めな。投けてくれんと。襟かい掴んで引つかづくあ痛た。調あ痛とは卑怯者。ヤアこりや縛付けられた。扱は盗みほざいたな。ヤ生掴めどう掴めめては礎と喰はせ。ヤ強盗めヤ獄門めとは蹴飛ばかし。紙屋治兵衛盗みして縛られたと。呼ばはり喚けば行交ふ人四邊近所も馳集る。内より侍飛んで出で。盗人呼ばはり汝が。治兵衛が何盗んだサアぬかせと。太兵衛をかき掴み土にぎやつとのめらせ。起きれば踏付け踏みめし。引つ捕へてサア治兵衛。踏んで腹いよと足許につき付くるを。縛られながら頼かま。踏付けく踏みさがされて土まぶれ。立上つて睥め廻し。調あたりの奴ば

らよう見物して踏ませたナア。一々に面見
覺えた。地返報する覺えてをれと。へらす
口にて逃出す。立寄る人々どつと笑ひ。
踏まれてもあの願ねがひの橋から投げつけて水喰みづくはせ
フシやるなくと追つかけ行く。地人立すけ
ば侍立寄つて縛り目解き。頭巾取つたる面
體。ヤア孫右衛門殿兒ぢや人。アツア面目
なやとどうと坐し。スエテ土に平伏し泣き
たる。扱は兄御様かいのと。走出づる小春
が胸ぐら取つて引つ据ゑ。畜生め。狐め。
地太兵衛より先うぬを踏み度いと足を擧ぐ
れば孫右衛門。ヤイ〜〜。其のたは
けから事起る。人をたらずは遊女の商賣。
今日に見えたか。此の孫右衛門はたつた今
一見にて女の心の底を見る。二年餘りの馴
染の女。心底見付けぬうろたへ者。小春を
踏む足で。うろたへた己れが根性をなぜ踏
まぬ。エ、是非もなや。弟とは言ひながら
三十におつかゝり。勘太郎お末といふ六つ
と四つの子の親。六間口の家踏みしめ。身

代漬るゝ辨へなく。兄の意見を受くる事か。
舅は叔母掣。姑は叔母ぢや人親同然。女房
おさんは我が爲にも従妹。結び合ひ〜重
重の縁者親子中。一家一門參會にも。己れ
が曾根崎通ひの。悔みより外餘の事は何も
ない。いとしは叔母ぢや人。連合五左衛
門殿はにべもない昔人。鳴の甥御に倒され
娘を捨てた。おさんを取返し。天満中に恥
かゝせんとの腹立。叔母一人の氣抜ひ敵に
成り味方に成り。地病に成る程心を苦しめ。
己れが恥を包まるゝ恩知らず。此の罰たつ
た一つでも行く先ま的が立つ。かくては
家も立つまじ小春が心底見届け。其の上の
一思案叔母の心も休め度く。此の亭主に工
面し。己れが病の根源見届くる。女房子に
も見かへしは尤。心中よしの女郎。ア、お
手柄。地結構な弟を持ち。人にも知られし
粉屋の孫右衛門。祭の練家か氣違ひか。遂
に差さぬ大小ほつこみ。藏屋敷の役人と。
小話役者の眞似をして。馬鹿を弄した此の
刀。捨處が無いわい。小腹が立つつやら
可笑しいやら。胸が痛いど齒きしみし。泣
顔かくす遊面に小春は始終咽せ返り。皆お
道理と。フシばかりにて詞も。涙にくれにけ
り。地大地を叩いて治兵衛。誤つた。〜
兄ぢや人。三年先よりあの古狸に魅入られ。
地親子一門妻子迄袖になし。身代の手縫も。
小春といふ屋尻切にたらされ後悔千萬。ふ
つつり心残らねば尤足も踏み込むまじ。
ヤイ理め。狐め。屋尻切め。地思ひ切つた
證據これ見よと。肌にかけたる守袋。圓月
頭に一枚づつ取交したる起請。合せて二十
九枚戻せば戀も情もない。こりや受取れと
はたと打付け。兄ぢや人。あいつが方の我
等が起請數改め請取つて。此方の方で火に
くべて下され。サア兄貴へ渡せ。地心得や
したと涙ながら投出す守袋。孫右衛門押開
き。一二三四。二十九枚數揃ふ。外に一
通女の文こりや何ぢやと。開く所をア、そ
りや見せられぬ大事の文と。取付くを押し

除け。行燈にて上書見れば小春様参る。紙

屋内さんより。読みも果てすさあらぬ顔に

て懐中し。これ小春。最前は侍冥利。今

は粉屋の孫右衛門商賣冥利。女房限つて此

の文見せず我一人披見して。起請共に火に

入れる。誓文に違ひはない。ア、忝い。

それで私が立ちますと。又伏し沈めは。ハ

ア〜。調うぬが立つの立たぬとは。

人がましい。これ兄ぢや人。地片時も彼奴

が面が見ともなし。いざござれさり乍ら。

此の無念口惜しさどうも堪らぬ今生の思

出。女が面一つ踏む。御免あれとつと高

つて地踏鞠ふみ。詞エ、くしなしたり。

地足かけ三年戀しゆかしもいとし可愛も。

今日といふ今日たつた此の足一本の暇乞

と。額際をはつたと蹴て。わつと泣出し兄

弟づれ。歸る姿もいた〜しく跡を見送り

聲をあけ。歎く小春もむごらしき。不心中

か心中か。誠の心は女房の其の一筆の奥深

く。たがふみも見ぬ戀の道別れて。こそは

三五、歸りけれ。

中 之 卷

ハルシ福徳に。地天満つ神の名を直に天神

橋と行き通ふ。所も神のお前町營む業も紙

見世に。紙屋治兵衛と名を付けて千早ふる

程買ひに来る。かみは正直商賣は。フシ所

がらなり老舗なり。地夫が炬燵に轉寢を

枕屏風で風防ぐ。外は十夜の人通り見世と

内とを一掃に。女房おさんの心配り。詞日

は短し夕飯時市の側迄使にいて。玉は何し

てるる事ぞ。地此の三五郎めが戻らぬ事風

が冷たい二人の子供が寒からう。お末が乳

の飲み度い時分も知らぬ。阿呆には何が成

る辛氣な奴ぢやと獨語。詞か、様一人戻つ

たと地走り歸る兄息子。詞ヲ、勘太郎戻り

やつたかお末や三五郎は何とした。宮に遊

んで乳飲みたいとお末のたんと泣きやりま

した。さうこそさうこそ。こりや手も足も

釘になつた。と、様の寝てござる炬燵へあ

たつて暖まりや。地此の阿呆めどうせうと

フシ待ち兼ね見世にかけ出づれば。地三五郎

唯一人のら〜として立歸る。詞こりやた

はけお末はどこに置いて来た。ア、ほんに

何處でやら落してのけた。誰ぞ拾たかしら

んまで。ど、こそ尋ねて来ませうか。己れま

あ〜大事の子を怪我でもあつたら撲ち殺

すと。地喚く所へ下女の玉お末を背中にお

う〜いとしや。詞辻に泣いてござんした。

三五郎守するなら地ろくにしやと喚き歸れ

ば。詞ヲ、可愛や〜。地乳飲みたからう

のと同じく炬燵に添乳して。これ玉。其の

阿呆め覺える程くらはしや〜。地といへ

ば三五郎かぶり振り。詞いや〜たつた今

お宮で蜜柑を二つづつくらはせ。私も五つ

喰うたと。地阿呆のくせに輕口だてフシ苦笑

するばかりなり。詞ヤ阿呆にか〜つて忘り

よとした申し〜おさん様。西の方から粉

屋の孫右衛門様と叔母御様。連れ立つてお

出でなされます。これは〜そんなら治兵衛殿起そ。なう旦那殿起さしやんせ。母

様と伯父様が連立つてござるけな。此の短い日に商人が、晝中に寝たふりを見せては又機嫌が悪からう。地おつとまかせとむつくと起き算盤片手に帳引寄せ。二二天作の五九進が三進六進が二進。七八五十六に成る叔母打連れて孫右衛門内に入れば。聞や

兄ちや人叔母様これはようこそよく先づ是へ。私は只今急な算用致しかゝる。四九三十六欠三六が豊刃八分で二分の勤太郎よ末よ。地ば、様伯父様お出でちや煙草盆持つておじや。一三が三それおさん、フッお茶

上けましやと口ばやなり。聞いやく茶も煙草ものみには來ぬ。これおさん。如何に若いとて二人の子の親。結構なばかりみめではない。男の性の悪いは皆女房の油断から。身代破り女夫別れる時は男ばかりの恥ぢやない。地ちと目をあいて氣に張を持ちやいのといへば。叔母様愚かな事。

此の兄をさへ欺す不覺悟者女房の意見など暖かに。ヤイ治兵衛。此の孫右衛門をぬくぬくとだまし。起請まで返して見せ十日もたぬに何ぢや請出す。エ、うぬはなあ。小春が借錢の算用か。地措きをせと算盤おつ取り庭へぐわらりと投捨てたり。聞是は近頃迷惑千萬。先度より後今橋の間屋へ二度。天神様へ一度ならでは聞より外出ぬ私。

請出す事は扱置き思ひ出しも出すにこそ。いやんなく。昨夕十夜の念佛に講中の物語。曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に。天満の深い大盡が外の客を追ひのけ。直に其の大盡が今日明日に請出すとの是沙汰。地賣買高い世の中でも金とたはけは澤山など。色々の評判。聞こちの親父五左衛門殿常々名を聞抜いて。紀の國屋の小春に天満の大盡とは治兵衛めに極つた。嫌の爲には甥なれどこちは他人娘が大事。茶屋者請出し女房は茶屋へ賣りをらう。着類きそけに疵付けられぬ間に取返してくれうと。地查脱半分下りられしをなう騒々しい神妙にも成る事を。明さ暗さ聞届けて上の事と押宥め。此の孫右衛門同道した。聞孫右衛門の話には今日は昨日の治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と。地聞けば跡からはみ返るそも如何なる病ぞや。其方の父御は叔母が兄。いとしかや光譽道清往生の枕を上げ。聞單なり甥なり治兵衛が事頼むとの一言は忘れねど。地そなたの心一つにて頼まれしかひもないわいのと。スエチかつばと伏して恨み泣き。治兵衛手を打ち。聞ハア、よめたく。取沙汰のある小春は小春なれど。請出す大盡大きに相違。兄貴も御存じ先日暴れて踏まれた身すがらの太兵衛。妻子眷族持たぬやつ。金は在所伊丹から取寄する。とつくに彼奴めが請出すを私に押へられ。地此の度時節到來と請出すに極つた。我等存じも寄らぬ事といへばおさんも色を直し。聞たとへ私が佛でも男が茶屋者請出す。其の最良せう筈がない。是ばかりはこちの人に徹塵も嘘はないか。地證據に私が立ちますと。夫婦の詞割

符も合ひ扱はさうかと手を打つて叔母御心を休めしが。

地先づく嬉しいとて心に落付くため。頑固の親父殿疑の念なきやうに誓紙書すが合點か。

何が扱千枚でも仕らう。地懐中より。熊野の午王の群鳥比翼の誓紙引換へ。今は天罰起請文小春に縁切る思ひ切る。偽り申すに於ては上は梵天帝釋下は四大の文言に。

佛揃へ神揃へ紙屋治兵衛名多しつかり。血判をすゑて差出す。阿、母様伯父様のおかけで私も心落付き。地子中

なしても遂に見ぬ固め事皆悦んで下さんせ。阿尤々此の氣になれば固まる商賣事も繁昌しよ。一門中が世話かくも皆治兵衛

ためよかれ。兄弟の孫ども可愛さ。孫右衛門おじや早う歸つて親父に安堵させたい。世間が冷える子供に風ひかしやんな。

地是も十夜の如來のおかけはからなりともお禮念佛。南無阿彌陀佛と立歸る。フシ心ぞ直に

佛なる。地門送りさへそこくんに闕も越すや越さぬ中。炬燵に治兵衛又ころり被る

布圍の格子縞。まだ曾根崎を忘れずかと呆れながら立寄つて。布圍を取つて引退くれ

ば枕に傳ふ涙の瀧。フシ身も浮くばかり泣きぬたる。地引起し引立て炬燵の櫓につきす

急。顔つくくくと打眺め。阿あんまりぢや治兵衛殿。それ程名残惜しくば誓紙書かぬ

がよいわいの。一昨年の十月中の亥の子に炬燵明けた祝儀とて。まゐこれ妾で枕並べ

て此の方。女房の懐には鬼が栖むか蛇が棲むか。地二年といふもの巢守にしてやう

やう母様叔父様のおかけで。睦しい女夫らしい寝物語もせうものと。樂しむ間もなく

はんに酷いつれない左程心残らば泣かしやんせく。阿其の涙が蜆川へ流れて小春の

改んで飲みやらうぞ。地エ、曲もない恨めしやと。膝に抱付き。フシ身を投げ伏し口説

き。立ててぞ歎きける。治兵衛眼押拭ひ。悲しい涙は目より出で。無念涙は耳から

なりとも出るならば。言はずと心を見すべ

きに。同じ目より零るゝ涙の色の變らねば。心の見えぬは尤々。人の皮着た畜生女が。

名残もへちまも何ともない。遺恨ある身すからの太兵衛。金は自由妻子はなし請出す

上面しつれども。地其の時迄は小春めが太兵衛が心に従はず。少しも氣遣ひなされな

縦へこなさんと縁切れ。添はれぬ身に成りたりとも。阿太兵衛には請出されぬ若し金

ぜきで親方から遣るならば。物の見事に死んで見しよと。度々詞を放ちしがこれ見や

退いて十日も経たぬ中。地太兵衛めに請出さるゝ腐り女の四つ足めに。心はゆめく

残らねども。阿太兵衛めが威厳こき。治兵衛身代息ついての金に詰つてなんどと。大

腹中を觸れ廻り問屋中の交際にも。地面をまぶられ生恥かく胸が裂ける身が燃える。

エ、口惜しい無念な熱い涙血の涙。ねばい涙を打越え熱鐵の涙がこぼるゝとステテどうと伏して泣きければ。はつとおさんが興さ

め顔。阿アウハウそれなればいとしや小春は死にやるぞや。ハテサテなんほ利發でもさすが町の女房ぢやの。あの不心中者なんの死なう。灸をすゑ薬飲んで命の養生するわいの。いやさうでない私が一生いふまゝとは思へども。隠し包んでむざ／＼殺す其の罪も恐ろしく。大事の事を打明ける。阿小春殿に不心中芥子種もなければ。二人の手を切らせしは此のさんがからくり。こな様がうかくと死ぬる氣色も見えし故。餘り悲しさ女は相身互ごと。切られぬ所を思ひ切り夫の命を頼むくと。かき口説いた文を感じ。自身にも命にも代へぬ大事の殿なれど。引かれぬ義理合思ひ切るとの返事。私やこれ守りに身を放さぬ。是程の賢女がこなさんと契約違へ。おめおめ太兵衛に添ふものか。女は我人一向に思ひ返しのない物。死にやるわいの。ア、ア、ひよんな事サア／＼サどうぞ助け

請の中知らぬ女の文一通。兄貴の手へ渡りしはお主から行た文な。それなれば此の小春死ぬるぞ。ア、悲しや此の人を殺しては、女居士の義理立たぬ先づこなさん早う往て。どうぞ殺して下さるなとッ夫に縋り泣沈む。それとても何とせん半金も手付を打ち、繋ぎ留めて見るばかり。阿小春が命は新銀七百五十匁呑まされば此の世に止むる事ならず。今の治兵衛が四つ三匁の才覺。打ちみしやいでもどこから出る。地なう仰山なそれですまばいと易しと。立つて軍筒の小抽斗明けて惜しきもないませの。紐付袋押開き投出す一匁。治兵衛取上げや金か。しかも新銀四百匁。こりやどうしてと我が置かぬッ金に目さむるばかりなり。阿その金の出所も跡で語れば知れる事。此の十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれども。それは兄御と談合して商賣の尾は見せぬ。小春の方は急な事其處に四々の一貫六百匁。ま一貫四百匁と。地大抽出の錠明けて軍筒をひらりととび八丈。京縮緬のあすは無い夫の命白茶裏。綾のお末が両面の紅絹の小袖に身をこがす。是を曲けては勘太郎が手も綿も無い袖無しの。羽織も交ぜて郡内の始末して着ぬ淺黄裏。黒羽二重の一帳羅定紋丸に葛の葉の。のきも退かれもせぬ中は。内裸でも外錦。男飾りの小袖迄さらへて物數十五種。内端に取つて新銀三百五十匁。よもや貸さぬといふ事は無い物迄もある顔に。夫の恥と我が義理を。一つに包む風呂敷の中に。情を籠めにける。阿私や子供は何着いでも男は世間が大事。請出して小春も助け。太兵衛とやらに一分立てて見せて下さんせと。地いへども始終差俯向き。ッしく泣いてるたりしが。阿手付渡して取止め請出して其の後。圍うて置くか内へ入るゝにしてから。其方は何と成る事ぞと言はれてはつと行當り。阿アッアさうぢや。ハテ何とせう子供の乳母か。地飯炊きか。隠居なりともしませうとスエエ

わつと叫び伏沈む。詞餘りにぞ加恐ろしい

此の治兵衛には親の尉天の尉。地佛神の尉

は當らずとも女房の罰一つでも將來はよ

ない筈。免してたもれと手を合せ口説き歎

けば勿體ない。それを拜む事かいの手足の

爪を放しても。皆夫への奉公紙問屋の仕切

金。いつからか着類を質に間を渡し。私か

箆筒は皆空殻それ惜しいとも、フシ思ふにこ

そ。地何いうても跡へんでは返らぬ。サア

サア早う小袖も着替へてにつこり笑うて往

かしやんせと。下に郡内黒羽二重縞の羽織

に紗綾の帯。金拵への中脇差今宵小春が血

に染むとはフシ佛や知召さるらん。地三五郎

爰へと風呂敷包肩に負はせて供に連れ。金

も肌身にしつかと着け立出づる門の口。治

兵衛は内におひやるかと。毛頭巾取つて入

るを見れば。南無三寶剪五左衛門は是は扱。

折も折ようお歸りなされたと、フシ夫婦は願

倒狼狽ゆる。地三五郎が負うたる風呂敷も

ぎ取てどつかと坐り尖り聲。詞女郎下には

つからう。舞殿是は珍しい上下着飾り。脇

指羽織あつばれよい衆の金遣ひ。紙屋とは

見えぬ。新地への御出でか御精が出まする。

内の女房入らぬ物おさんに暇やりや。地連

れに來たと口に針ある苦い顔。治兵衛は兎

角の言句も出ず。詞父様今日は寒いによ

歩かしやんす。地先づお茶一つと茶碗をし

ほに立寄つて。詞主の新地通ひも。最前母様

孫右衛門様御出でなされて。段々の御意見

熱い涙を流し。誓紙を書いての發起心。地

母様に渡されしがまだ御覽なされぬか。ヲ

誓紙とは此の事かと懐中より取出し。詞

阿呆狂ひする者の起請誓紙は方々先々。書

出し程書き散らす。合點いかぬと思ひく

來れば案の如く。此の様でも梵天帝釋か。

地此の間で去狀書けとすんくりに引裂い

て投捨てたり。夫婦はあつと顔見合せ、フシ

呆れて。詞もなかりしが。地治兵衛手をつ

き頭を下け。詞御立腹の段尤とも御詫申す

は以前の事。今日の只今より何事も慈悲と

思召し。おさんに添はせて下されかし。

地たとへば治兵衛乞食非人の身となり。諸

人の筈の餘りにて身命は繋ぐとも。おさん

は急度上に据ゑ憂い目見せず辛い目させ

ず。添はねばならぬ大恩あり。其の譯は年

月もたち私の勤め方身上持直し。お目にか

くれば知るゝ事それ迄は目を塞いで。おさ

んに添はせて、フシ給はれとはらく。こほ

す血の涙疊に。喰ひ付き詫びければ。詞非

人の女房には猶ならぬ去狀書けく。地お

さんが持參の道具衣類敷改めて封付けん

と。立寄れば女房あわて着る物の敷は揃う

てある。改むるに及ばぬと駈塞がれば突退

けぐつと引出し。詞コリヤどうぢや。地又

引出してもちんからり有りたけこたけ引出

しても。繼ぎれ一尺あらばこそ葛籠長持衣

裳櫃。是程空に成つたかと舅は怒りの目玉

も据り。夫婦が心は今更に明けて悔しき

浦島の。炬燵布團に身を寄せて、フシ火にも

入り度き風情なり。地此の布呂敷も氣遣ひ

と引解き取散らし。曰さればこそく是も
質屋へ飛ばすのか。ヤイ治兵衛女房子供の
身の皮剥ぎ。其の金でおやま狂ひ。地いけ
どう搦摸め女房どもは叔母物なれど此の五
左衛門とは赤の他人。損をせう好みが無い。
孫右衛門に断り兄が方から取返す。地サ
ア去状々と七重の扉八重の鎖。百重の圍
は通るゝとも通れ方なき手詰の段。ヲ治
兵衛が去状筆では書かぬ是御覽せ。おさん
さらばと脇差に手をかくる縋り付いてなう
悲しや。父様身に誤あればこそ段々の訛言。
餘り理運過ぎました。治兵衛殿こそ他人な
れ子供は孫可愛うはござらぬか。わしや去
状は受取らぬと。夫に抱付きスエテ聲を上げ
泣叫ぶ。こそ道理なれ。よいく去状入ら
ぬ女郎め来いと引立つる。いや私や行かぬ
飽きも飽かれもせぬ仲を。何の恨に晝日中
女夫の恥は曝さぬと泣きわぶれども聞入れ
ず。此の上に何の恥町内一杯喚いていく
と。引つ立つれば振放し小腕取られよろよ

ろと。よろめく足の爪先に可愛やはたと行
當る。一人の子供が目を覺し。曰大事の母
様なぜ連れて行く祖父様め。地今から誰と
寝ようぞと慕ひ歎けばヲ、いとしや。生れ
て一夜も母が肌を放さぬもの。晩からは父
様と寝ねしやや。二人の子供が朝ぶさ前忘
れず。必ず桑山飲ませて下され。なう悲
しやと言ひすつる跡に見捨つる子を捨つ
る。藪に夫婦の二股竹長き。別れと 三重

下之卷

戀なまきげ。地爰を瀬にせん。蜷川 フシ流
るゝ水も。行通ふ。人も昔せぬ丑三つの。
ホラシ空十五夜の月芽えて。地光は暗き門行
燈大和屋傳兵衛を一字がき。眠りがちな
拍子木に番太が足取千鳥足。フ御用心御
用心も聲更けたり。曰駕籠の衆いかう更け
たのと。地上の町から下女子。迎ひの駕籠も
天和屋の。潜りぐわらくつと入り。曰
紀伊の國屋の小春さん借りやんしよ。地迎
ひとばかりほの聞え。跡は三つ四つ挨拶の。
程なく潜りによつと出で。曰小春様はお泊
りぢや。駕籠の衆直に休ましやれ。ア、言
ひ残したこれ花車さん。小春様に氣を付け
て下さんせ。太兵衛様への身請が濟んで。
金請取つたりや預り物。酒過させて下んす
など。地門の口から明日待たぬ。治兵衛小
春が土に成る。フ種蒔き散して歸りける。
ハラシ茶屋の茶釜も。夜一時休むは八つと
七つとの間にちらつく短檠の。光も細く更
くる夜の。川風寒く霜満てり。まだ夜が深
い送らせましよ。曰治兵衛様のお歸りぢや
小春様起しませ。それ呼びませは亭主が聲。
地治兵衛潜りをぐわさと明け。曰コレく
傳兵衛。小春に沙汰なし耳へ入れれば。夜明
け迄括られる。それ故よう寝させて抜けて
いぬる。日が出てから起して往なしや。我
等今から歸ると直に。買物のため京へ上る。
大分の用なれば。中拂の間に合ふやうに歸
るは不定。最前の金で。其方の算用合も仕
舞ひ。地河庄が所へも後の月見の拂ひとい

うて。四つ百五十日請取とつてたもらうし
と。同 福島の西悦坊が佛壇買った奉加。銀
一枚回向しやれと遣つてたも。其の外にか
かり合はハアそれよく。磯市が花銀五。
こればかりぢや仕舞うて寝やれ。地さらば
さらば戻つて逢はうと。二足三足行くより
早く立歸り。脇指忘れたちやつとく。同
なんと傳兵衛。町人は爰が心易い。侍なれ
ば其の儘切腹するであろの。我等預つて置
いてとんと失念。小刀も揃うたと。同 渡せ
ば取つてしつかと指し。是さへあれば千人
力。もう休みやれと立歸る。追付けお下り
なされませ。よう御座りまもそこくに跡
は櫃をこつとりと。フシ物音もなく鎮まれ
り。地 治兵衛はつつと往ぬる顔。又引返す
忍び足。大和屋の戸に縫り。内を覗いて見
る内に。間近き人影びつくりして。向ひの
家の物蔭にフシ過ぐる間暫し身を忍ぶ。地 弟
ゆゑに氣を碎く粉屋孫右衛門は先に立ち。
跡に丁稚の三五郎が。背中に甥の勘太郎連

れ。行燈目當に駈來り。大和屋の戸を打敲
き。同 ちと物問ひませう。紙屋治兵衛はる
ませぬか。ちよつと逢はせて下されと呼ば
はれば。地 扱は兄貴と治兵衛は。フシ身動き
もせず猶忍ぶ。地内から男の寝ほれ聲。同 治
兵衛様はまちつと先に。京へ上るとてお歸
りなされた。爰にはござらぬと。地 重ね
て何の音なひも。涙はらく孫右衛門。歸
らば途で逢ひそなもの。京へとは合點がゆ
かぬ。ア、氣遣ひで身が顫ふ。小春を連れ
ては行かぬかと。胸にぎつくり横たはる。
心苦しさ堪へかね。又戸を敲けば。同 夜更
けて誰ぢやもう寝ました。御無心ながらま
一度お尋ね申し度い。紀伊の國屋の小春殿
はお歸りなされたか。若し治兵衛と連立つ
て行きはなされぬか。ヤ。ヤ。なんぢや小
春殿は二階に寝てぢや。地 ア先づ心が落付
いた。心中の念は無いどこに屈んで此の苦
をかける。一門一家親兄弟が。同 唾を呑ん
で臍臍を揉むとはよも知るまい。舅の怨み
に我が身を忘れ。無分別も出ようかと。意
見の種に勘太郎を。連れて尋ぬるかひもな
く。今迄逢はぬは何事と。ステおろく涙
の獨り言。隠るゝ間の隔てねば。聞えて治
兵衛も息をつめ。フシ涙のみ込むばか
なり。同 ヤイ三五郎。阿呆めが夜々うせる所
外には知らぬかと。地 いへば阿呆は我が名
ぞと心得て。同 知つてゐれど爰では恥かし
うて言はれぬ。知つてゐるとはサアどこぢ
やいうて聞かせ。聞いた跡で叱らしやんな。
毎晩ちよこく行く處は。市の側の納屋の
下。地 大だはけめそれを誰が吟味する。サ
ア來い裏町を尋ねて見ん。勘太郎に風引か
すな。同 ぐくにも立たぬ父めを持つて。可
愛や冷い目をするな。此の冷たさで仕舞へ
ばよいが。地 ひよつと憂い目は見せまいか。
憎やくの底心は。不便々々のうら町を。
フシいぞ尋ねんと行き過ぐる。影隔れば駈
出でて。跡なつかしげに伸上り。心に物を
言はせては。十悪人の此の治兵衛。死に次

第とも捨置かれず。跡から跡迄御厄介。勿體なやと手を合せ。伏拜みく猶此の上のお慈悲には。子供が事をとばかりにて暫し。涙に咽びしが。地とても覺悟を極めし上。

小春や待たんと大和屋の。潜りの隙間差覗

けば。内にちらつく人影は小春ぢやないか。

待てと知らせの合圖の咳。エヘン。くか

つちくえへんに拍手木打交せて。上の町

から番太郎が。くるくたぐる風の夜は。

せきく廻る火の用心。圓ごよざ。く。

地くも人忍ぶ。我にはつらき葛城の。神

がくれてやり過し。隙を窺ひ立寄れば。

潜り内からそつと明く。詞小春か。待つて

か。治兵衛様。地早う出たいと氣をせけばせ

く程廻る車戸の。フシ明くるを人や聞付け

んと。地しやくつて明くればしやくつて響

き。耳に轟く胸の内。治兵衛が外から手を

添へても。心願ひに手先もふるひ。三分四

分五分一寸の。先の地獄の苦しみより。鬼

朝。小春は内を抜け出でて。互に手に手を
取交し。北へいかうか南へか。に。し。か
東か行く末も。心の早瀬蜆川流るゝ月に逆
らひて足を。ばかりに 三五

名残の橋づくし

ハレシ走り書。謠の本は近衛流。野郎帽子

は若紫。悪所狂ひの。身の果は。斯く成

り行くと。フシ定まりし。釋迎の教もある

事か見度し憂身の因果經。明日は世上の言

草に。スエテ紙屋治兵衛が心中と。仇名散り

行く櫻木に。ねほりはほりを繪草紙の。長

地版摺る紙の其の中にも知らぬ死神

に。誘はれ行くも商賣に。疎き報いと觀

念も。とすれば心引かされて。ハオクリ 歩み。

惱むぞ道理なる。フシオクリ頃は十月。十

五夜の。フシ月にも見えぬ。身の上は。心の

闇の印かや。フシ今置く霜は明日消ゆるは

かなき響のそれよりも先へ消え行く閨の

内。いと可愛いと締めて寝し。移り香も

朝夕渡る。此の橋の天神橋は其の昔。蒼
丞相と申せし時筑紫へ流され給ひしに。
君を慕ひて太宰府へたつた一飛梅田橋。跡
おひ松の縁橋。別れを歎き。悲しみて跡に
こがるゝ。フシ櫻橋。今に話を聞き渡る。
一首の歌の御威徳。スエテかゝる尊きあら神
の。氏子と生れし身を持つて。其方も殺し
我も死ぬ。オクリもとはと。問へば分別の
あのいたいけな貝殻に。一杯もなき蜆橋。
短きものは我々が。歌此の世の住居。秋の
日よ十九と。廿八年の。今日の今宵を限
りにて。二人いの。ちの捨て所。爺と婆と
の末迄もまめで添はんと契りしに。フシ丸
三年も。馴染いで。此の災難に大江橋あれ
見や難波小橋から。舟入橋の濱傳ひ。是迄
來れば来る程は冥途の道が近付くと。歎け
ば女も縄り寄り。もう此の道が冥途かと見
交す顔も見えぬ程。落つる涙に堀川の。フシ
橋も水にやひたるらん。北へ歩めば。我が
宿を一目に見るも見返らず。子供の行方女

房の。哀れも胸に押包み。ギンナクリ高へ渡る

橋柱数も限らぬ家々を。如何に名付けて八軒屋。

誰と伏見の下り舟着かぬ内にと道急ぐ。フシ此

の世を捨てて。行く身には。聞くも恐ろし。フ

シ天満橋。歌淀と大和の二川を。一つ流れの大

川や水と魚とは連れて行く。我も小春と二人連

一つ及の三頼川。手向の水に請けたやな。何か

歎かん。此の世でこそは添はずとも。未來は。

言ふに及はずこんどの。すつとこんどの其

の。先の世迄も夫婦ぞや。一つ蓮の頼みには。

一夏に一部。夏書せし。大慈悲の普門品妙法

蓮華の京橋を。地獄和禮越ゆれば到る彼の岸の玉

の臺に乗りをへて。地佛の姿に身を成橋。衆生

濟度がまゝならば流れの人の此の後は。絶えて

心中せぬやうに。ホシ守り度いぞと。及び無

き。願ひも世上のよまひ言。思ひやられてあは

れなり野田の入江の。水煙。秋山の端白くほの

はのと。ハツとあれ寺々の。鐘の聲こうく。か

うしていつ迄か。とても存らへ果てぬ身を最期

急がん此方へと手に百八の玉の緒を。涙の玉に

くりまぜて南無網島の大長寺。藪の外面のいさ

ら川。エエテ流れ漲る樋の上を最期。フシ所と

着きにける。

地なういつ落うかく歩みても。爰ぞ人の死場

とて定まりし所もなし。いざ爰を往生場とラシ

手を取り土に坐しければ。地さればこそ死場は

いづくも同じ事と言ひながら。私私が道々思ふ

にも二人が死顔並べて。小春と紙屋治兵衛と心

中と沙汰あらば。おさん様より頼みにて殺して

くれるな殺すまい。挨拶切ると取交せしその文

を反古にし。地大事の男をそのかしての心中

は。流石一座流れの勤めの者。義理知らず隔り

者と世の人千人萬人より。おさん様一人の蔑

み。恨み妬みもさぞと思ひやり。未來の迷ひは

フシこれ一つ。私私を爰で殺してごなさん何處

ぞ所を變へ。地ついと脇でと打突れ口説けば共

にくどき泣き。ア、聞ぐちな事ばかりおさんは

弱に取り返され。暇をやれば他人と他人。離別

の女に何の義理。道すがらいふ通り今度の今度

のすんどこんどの先の世迄も女夫と契る此の二

人。枕を並べ死ぬるに誰が殺る誰が妬む。サア

其の離別は誰が業私よりごなさん猶愚痴な。身

體があつた世へ連立つか。地所々の死にををして

へ此の身體は鳥鳥に啄かれても。二人の魂つ

きまつぱり。地獄へも極樂へも連立つて下さん

せと。エエテ又伏沈み泣きければ。聞テ、それよ

く此の身體は。地水火風死ねれば空に歸る。

五生七生朽ちせぬ。地夫婦の魂離れぬ印合點

と。地指すはと抜放し元結際より我が黒髪。

ふつつと切つてこれ見や小春。地此の髪のある

中は紙屋治兵衛といふおさんが夫。髪切つたれ

ば出家の身三界の家を出で。妻子珍貴不隨者

法師。おさんといふ女房なければ。地お主が立

つる義理もなしと涙乍ら投出す。ア、嘘しうご

ざんすと小春も脇差取上げ洗ひつ梳いつ撫で付

けし。むごや惜氣も投島田はらりと切つて投捨

つる。枯野の薄夜半の霜。フシ共に亂る、哀れさ

の昔。とても事の事にさつぱりと死場も變へて山

と川。此の樋の上を山に準へ其方が最期場我

は又。此の流れにて首縊り最期は同じ時なが

ら。捨身の品も所も變へておさんに立てぬく心

の道。地その抱へ帯此方へと若紫の色も香も。

無常の風に輪樋の此の世彼の世の二重廻り。樋

の粗木にしつかと括り先を結んで狩場の雉の。

つまゆゑ我も首しめぐる異結。我と我が身の

鳥

死、拵見るに目もくれ心くれ。因こなさんそれ

で死なしやんすか。所を隔て死ねれば側にも入

も少しの間。地爰へ〜と手を取合ひ刃で死ぬ

るは一思ひ。さぞ苦痛なされうと。思へばいと

しいヲシ〜と止め。かねたる忍び泣き。首

益るも喉つくと死ぬるに愚かのあるものか。よ

しない事に氣をふれ最期の念を亂さずとも。

西へ〜と行く月を如來と拜み目を放さず。只

西方を忘らりやるな。心残りの事あらばいうて

死にや。何にも無〜。こなさん定めてお二

人の子達の事が氣にかゝる。アレひよんな事言

ひ出して又泣かしやる。地爰親が今死ぬるとも

何心なくすや〜と。可愛や寝顔見るやうな。

忘れぬはこればつかりと。エテかつばと伏して

泣沈む。地聲も争ふ村鳥鳴放れて鳴く聲は。今

のあはれを問ふやとて。フレイと涙を添へにけ

る。因なうあれを聞きや二人を冥途へ迎ひの鳥、

午王の眞に誓紙一枚書く度に。熊野の鳥がお山

にて三羽つつ死ぬると。昔より言ひ傳へしが。

地我と其方が新玉の年の始めに起請の書きぞめ。

月の始め月頭書きし誓紙の數々。その度毎に三

羽つつ殺せし鳥は幾何ぞや。常にはかはいかは

いと聞く今宵の耳へは。其の殺生の恨みの罪。

報い〜と。フレ閉ゆるぞや。地報いと誰のゑ

ぞ我のゑ辛き死を遂ぐる。許してくれと抱き寄

すれば。いや我故と締め寄せて顔と顔を打重

ね。涙に閉づるヲシ鬢の髪野邊の。嵐に氷りけ

り。地後へ響く大長寺の鐘の聲。南無三寶長き

夜も。夫婦が命短夜と。ヌシはや明渡る。地晨朝

に最期は今ぞと引寄せて。跡迄残る死顔に泣顔

残すな残さじと。につと笑顔のしろ〜と霜に

凍えて手も顫ひ。我から先に目も眩み刃の立て

ども泣く涙。ア、せくまい〜早う〜と女が

勇むを力草。風誘ひ來る念佛は我に勤むる南無

阿彌陀佛。彌陀の利劍とぐつと刺され引きす

ゑてものり返り。七顛八倒こは如何に切先喉の

吭を外れ。死にもやらざる最期の業苦共に亂れ

て苦しみの。地氣を取直し引寄せて。罅元迄刺

通したる一刀。扶る苦しき腕の。フレ見果てぬ夢

と消え果てたり。地頭北面西石脇隊に羽絨打若

せ死骸を繕ひ。泣いて盡させぬ名残の袂見捨て

て抱帯をたぐり寄せ。首に毘を引つかる寺の

念佛も切回向。有縁無縁乃至法界。平等の聲を

み外しヲシ暫し苦む。地なり颯風に揺らるゝ如

くにて。次第に絶ゆる呼吸の遺息せきとむる種

の口に。此の世の縁は切れ果てたり。朝出の漁

夫が網の目に見付けて死んだヤレ死んだ。出合

へ〜と聲々にいひ廣めたる物語。直に成佛得

脱の誓ひの網島心中と目ごと。涙をかけにけ

り。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有り

い〜とも又寫しなる故節筆の長短墨譜の甲乙

上下あやまり甚だすくならず三寫鳥寫馬な

れば文字にも又違失多かるべし全く予が直之

正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門

治重新に七行大字の板を彫りて直の正本のし

るしを亂せよとの求にしたがひ予が印判を加

ふる所左の如し

竹本 筑後 椽田 (書印)

大阪高麗橋堂丁目

山本 九兵衛版

正本屋

山本 九右衛門版